

## マシソンの疑似英雄詩『ゴフ』（ゴルフ）

海 老 澤 豊

18 世紀前半における疑似英雄詩のなかには、スポーツを題材にした一連の「競技詩」があり、ジョウゼフ・アディソンの『転球場』(1698)を嚆矢として、マシュー・コンカネンの『フットボールの試合』(1720)、ウィリアム・サマヴィルの『転球場』(1727)と『ホビノル、野外の競技』(1740)、ニコラス・ジェイムズの『レスリング』(1742)、ジェイムズ・ラヴの『クリケット』(1744)、ポール・ホワイトヘッドの『ジムナジアッド、すなわち拳闘の試合』(1744)などが書かれた。(1) これらの「競技詩」には古典叙事詩の戦闘場面を模した描写が見られるが、『イリアッド』や『アイネイス』の血で血を洗うような殺戮は、一定のルールに則ったスポーツ競技（流血がまったくないわけではないが、少なくとも死者は出ない）に置き換えられている。ここに挙げた作品のうち、『フットボールの試合』『クリケット』『ジムナジアッド』は実際に行われた試合に基づいて書かれたものだが、すべての作品を通じて選手たちは叙事詩の英雄のごとく描かれている。

エディンバラ生まれの法律家で後に聖職者になったトマス・マシソン (1721-60) が書いた『ゴフ、三巻からなる疑似英雄詩』も「競技詩」の範疇に属する作品である。ゴフとはゴルフの古名で、この詩ではスコットランドのゴルフ場を舞台に、二人の紳士が叙事詩の戦闘さながらの勝負を繰り広げる。ゴルフを単独で主題にした作品としては最も初期のものであるとされ、(2) 1743 年に初版が出た後に、1763 年に第 2 版、1793 年に第 3 版（表記は第 2 版となっている）が出版された。第 3 版では編者ピーター・ヒルによって過去に伏字になっていた人名が明らかにされ、若干の注も加えられた。(3)

『ゴフ』についてボンドは「競技のリアリズムと、女神やニンフたちの精細な雰囲気相结合された、実

に読みごたえがある卓越した疑似英雄詩」と激賞する。(4)『ゴフ』は従来まとまった批評の対象にはなっていないが、ゴルフの好事家にとっては垂涎の書というべき作品であり、版を問わず非常に高値でオークションに出品されている。またヒルの第 3 版に加えて、クラブコットとハミルトンの 2 種類の注釈書（後述）が出ていることも、他の「競技詩」に比べれば、たいへん恵まれていると言えよう。

### 1. スコットランドのゴルフ

作品を論じる前に、スコットランドのゴルフ事情について簡単に触れておきたい。ストラットは『スポーツと娯楽』(1801)で「ゴフは王国の北部で盛んにプレーされた」と述べ、ゴルフの起源をローマ時代の「パガニカ」という球技に求めている。(5)だがスチュワートは『ゴルフニア拾遺』(1887)で、これに異議を唱えて「この娯楽はそれほど古いとは考えられないが、イギリス北部の住民にとっては格別なものであった」と記しており、1457 年にはスコットランドにおいて「より重要なアーチェリーの練習」の妨げになるという理由でゴルフを禁止する法令が出たと紹介している。(6) 起源については諸説あるようだが、ゴルフがスコットランドで盛んであったという見解は一致する。

『ゴフ』第 3 版を出版したピーター・ヒルは序文でこう述べている。(7)

ゴフという競技は 400 年以上にわたってスコットランドで知られ、実践されてきた。こう言うのも嬉しいことだが、ゴフはスコットランドで生まれた競技であり、イングランドやアイルランドのみならず、ヨーロッパのほぼすべての国に紹介されている。ゴ

フは西洋に広まったばかりか、東洋やインドでも知られており、アメリカもゴフの技術を誇っている。現在スコットランドや我らの姉妹たる諸王国には多くのゴルフ協会が存在している。その主たる目的は、気晴らしや娯楽であるばかりか、心身の健康を回復させ維持することに大いに役立つ、この男らしい運動の実践を促進することにある。

さらに遡れば、17 世紀にスコットランドのパーズで活躍した詩人ヘンリー・アダムソンは、知人の死を悼む『詩神の悲歌』(1638)で「我がクラブたちよ、もはやボールを飛ばして、空で唸りを上げさせる準備は必要ない」(第1歌Ⅱ.23-4)と歌っており、これは詩でゴルフに触れた最初期の例とされる。(8) またグラスゴー大学の学生であったジェイムズ・アーバックルは、グラスゴーを流れるクライド川(別名グロッタ)周辺の地誌を描いた300行余の『グロッタ』(1721)で、大仰な語彙を用いてゴルフのスウィングを滑稽に描く。(9)

緑の芝生に白い霜が広がり、  
草地が裸になってしまう冬にも、  
活発な若者たちは軽快な戦闘を始め、  
鉛で武装して、つなげたクラブを準備する。  
木材で曲線を描いて革の球体を打ち出せば、  
緻密で、弾力のある球は空に飛んでいく。  
これを遠いホールにまっすぐ打ち込み、  
誰が最初にそこに到達するかを賭けるのだ。  
熱心な競技者は集中してボールを見つめ、  
筋肉を引き絞り、さまざまな姿勢を試みる。  
大いなる力で押し出す打撃を叩いて、  
動く球の推進する進路を形成するのだ。  
適切な力で重い器具を振り落として、  
楯円を描いて射出し、ボールを打てば、  
ボールは屈曲して天に昇り、空で歌い、  
驚く群衆は競技者の技量を認めるのだ。  
だが不運にも定まらない打撃を振り下ろすと、  
その力はボールを速く転がすことに費やされ、  
敵は勝ち誇り、クラブはいたづらに罵られる。  
観客はあざけり、味方も不満を漏らす。

かく成功には常に喝采がついてくるが、  
敗北した理由を支持する者はわずかだ。

(Ⅱ. 129-50)

『ゴフ』出版の翌年にあたる 1744 年には、スコットランド民事控訴院の長官ダンカン・フォーブスを会長に戴いた「オナラブル・カンパニー・オヴ・エディンバラ・ゴルフアーズ」が、おそらく世界初となる組織化されたトーナメントを開催した。同年 4 月の『スコッツ・マガジン』はその模様を以下のように伝えている。(10)

古くからの健康的な運動であるゴフに巧みな、高位の人物数名の申請を受け、エディンバラ市議会の法律が 3 月 7 日に承認され、15 ポンドの値打ちがある銀のクラブを製作するための収入役が任命され、毎年 4 月の最初の月曜日にリースのゴルフ場で行われることになった。この法の定めによれば、志願者の姓名は試合に先立つ週の間に登録者ごとに 5 シリングを払って登録される。出場者は 2 人か 3 人のパーティを組み、多数の場合はくじ引きによる。最も多くのホールで勝った選手が勝者となり、2 人以上が同数の場合は、試合を決定づけるために彼らだけでラウンドをプレーする。勝者はゴフのキャプテンと呼称され、クラブに金か銀の小片を付ける。勝者は選手たちの議論の決定を受けて、2・3 人の選手およびゴルフ場の監督者に補助されて、単独で賭け金を配分できる。結果として、4 月 2 日に 10 人の紳士で行われた最初の試合は、エジンバラの外科医ジョン・ラトレイ氏が優勝した。

ケアによれば、参加予定者は 12 名であったようだが、いずれもエディンバラを代表するお歴々であった。優勝したラトレイは「銀のクラブ」を勝ち取り、「ゴフのキャプテン」という称号を担うことになったが、彼は 44 年から 47 年にかけて、また 51 年にも優勝することになる巧者であった。(11) ラトレイはエディンバラのアーチェリーの大会でも優勝して「銀の矢」を得ている。(12) これらのメンバーのうち数人は、マシソンの『ゴフ』で優れたゴ

ルファーとして讃えられている。

また「オナラブル・カンパニー・オヴ・エディンバラ・ゴルファーズ」は世界で初めて 13 条からなる「ゴルフのプレーにおける条項と規則」を制定したことで知られており、末尾には「キャプテン」としてラトレイのサインが入っている。この規則の一部を紹介すると、第 4 条には「ボールを打つために、石、骨、折れたクラブを取り除いてはならない、ただしフェアグリーン上であって、ボールから 1 クラブの距離にあるものは例外とする」とあり、第 10 条には「ボールが人、馬、犬、あるいは何か他のものによって止められた場合は、止められたボールはあるがままの状態プレーしなければならない」、また第 13 条には「ゴルフ場の保持のために作られた掘割、排水溝、水路、生徒の掘った穴、兵隊の塹壕などはハザードとは見なされない。これらに入ったボールは拾い上げて、ティーアップし、アイアン・クラブでプレーしなければならない」とある。(13) あるがままの状態プレーするというゴルフの精神が、すでに確立されていると言えよう。

スコットランドのダンバートンシャーで生まれた作家トバイアス・スモレットは『ハンフリー・クリンカー』(1771)で、エディンバラ近郊リースのゴルフ場に集う人々を描いている。(14)

リースのコースに見られる、お上品な人々の集団を、私はイングランドのどの集団でも見たことはない。リンクスと呼ばれる野原のすぐ近くで、エディンバラの市民たちがゴルフと呼ばれる競技を楽しんでいて、彼らは角を先端に付けた奇妙な種類のバットと、テニスボールよりもかなり小さいがはるかに硬い、羽毛の詰まった革製の小さな弾力のあるボールを用いるのだ。これを彼らは強い力と器用さで一つのホールから別のホールへ打つものだから、信じられないほど遠くまで飛んでいく。スコットランド人はこの娯楽をとてとても好いているので、天候が許す限り、控訴裁判所裁判官から卑しい商人まで、あらゆる階級の者たちがシャツ姿で混じり合って、実に熱心にボールを追いかけている姿が見られる。なかでも、私は特別なゴルファーの一団に紹介されたのだが、もっ

とも若い者が 80 歳になっていた。彼らは働かずに食っていける財産を持った紳士たちで、病気や不快の心配をまったく感じることもなく、今世紀の大半をこの気晴らしで楽しんできたのだ。また彼らは寝る前に必ずや 1 ガロンものクラレットを飲み干すのであった。この途切れることのない運動は、海からの厳しい風とあいまって、疑う余地もなく、常に食欲を増進させることになり、皆を襲う体の不調に対して体質を鍛え上げるのだ。

スモレットの筆遣いには誇張と思われるところもあるが、この一節はゴルフがスコットランド人にかくも好まれていたという証左になるだろう。

## 2. 『ゴフ』第 1 巻

『ゴフ』は 3 巻 358 行からなる作品で、エピグラフとして掲げられているのはウェルギリウスの『農耕詩』第 3 巻の冒頭「他の主題はかつて暇な心を魅惑したかもしれないが、今やすっかり使い古された」(ll. 3-4) という詩行である。つまりマシソンはこれまでに歌われたことのないゴルフという主題を取り上げると言いたいわけである。第 1 巻は古代の叙事詩風に主題の提示から始まる。

ゴルフと人間を私は歌う、彼はつないだクラブを  
ふるって競い、そのボールは天に侵入する。  
彼は平和に満ちた故郷、エドナの塔から  
名声を求めてリーサの平野を歩き回った。  
英雄は緑の野原で長いこと苦勞したのだ、  
屈強な腕を引き締め、重いクラブを振り回した。  
その苦勞は高くつき、その労力は勝利の  
月桂樹を勝ち取り、記念杯を手にするのだ。

(1: 1-8)

「エドナ」はエディンバラの詩的名称であり、「リーサの平野」は先にあげた大会が開かれたリースのゴルフ場を指す。続いてマシソンは「ゴフの偉大な守護者」(1: 10) たる女神ゴルフィニア(詩人が考案した神性)に靈感を与えよと祈願し、「カレドニア

の長たち」(I. 19) たるエディンバラのゴルファータ  
ちを讃える。

マクドナルドと比類なきダリンブルが  
重々しい武器をふるい、グリーンに挑んだ。  
ラトレイは技術に、クロスは力で有名だった、  
スチュアートとレスリーは砂地を叩いた。  
ブラウンとアルストンはよく知られた長で、  
詩人はこれ以上の名を挙げるのは控えよう。  
巨人のビガーがここからよく見える、  
インドの緑地に住む巨大なベヘモスのごとし。  
彼の大きな巨体が目を逃れることはまずなく、  
驚愕する観客は彼のプレーに目を見張る。  
ここで偉大な正義の擁護者フォーブスは、  
悪党の恐怖の的、善人の信頼する者として、  
人類に仕える労苦に疲弊すると、  
肉体を休養させ、精神をなごませたのだ。

(1: 21-34)

ここで名前の挙がっている 10 人はいずれも実在  
した人物で、ダリンブル、ラトレイ、クロス、レス  
リー、ビガーは「オナラブル・カンパニー・オヴ・  
エディンバラ・ゴルファーズ」のメンバーで、  
1744 年大会の出場者でもあった。(15) すでに述べ  
たように、フォーブスはスコットランド民事控訴院  
長官で、カンパニーの会長職を務めたが、著者不明  
の『回顧録』には次の一節がある。(16)

エディンバラでの夏季開廷期の際には、彼は毎週土  
曜日に一人の紳士だけを伴ってストニーヒルに出か  
け、説教を聞くことに捧げる時間を除いては、月曜  
日まで田園生活の楽しみを味わい、リースを訪れて  
ゴルフに興じるのであった。彼は無頓着にプレーす  
る者に不満を感じ、相手が自分よりうまく立ち回  
ると不快を示した。彼はカー杯ボールを打ち、長く筋  
肉質の腕と、均整のとれた体で、いつも遠くに飛ば  
した。ホールに近づくと、大いなる注意を払って慎  
重にパターした。

マシソンはこのような前置きをした後で、ピグマ

リオンとカスタリオが 1 対 1 で腕を競う試合の模  
様を描き始める。太陽が中天に差しかかる頃、舞台  
となるのはリースのゴルフ場であった。クラブコッ  
トによれば、このゴルフ場にはブレイヘッド (414  
ヤード)、ソーミル (461 ヤード)、イースト (426 ヤ  
ード)、サウス・ミッド (495 ヤード)、ソーンツリー  
(435 ヤード) と 5 つのホールしかなく、競技者は  
これを何周か巡って勝負を競うのである。(17)

カスタリオと大胆な好敵手は急いで進み、  
ともにクラブで武装し、打撃を待ちかねる。  
カスタリオのシャフトは最良のトネリコで作られ、  
鉛で重く、ヘッドは角で包んであった。  
(リースに住むディクソンの業物で、  
クラブを作る腕前は抜きん出ている)

(1: 37-42)

引用前半で戦闘の比喩が使われていることは明ら  
かだが、両名は剣の代わりにゴルフ・クラブで武装  
し、一騎打ちにはやる心を抑えきれないのである。  
当時のクラブとボールについては、ストラットの「ク  
ラブのシャフトはまっすぐで、通例トネリコで作ら  
れ、長さはおよそ 4.5 フィートである。湾曲部はシャ  
フトの底に付けられ、表側は角、裏側は鉛になって  
いる。ボールは小さいがとても固く、羽毛を詰め込  
んだ革で作られている」という記述が参考になる。  
(18) また「ディクソン」とはゴルフ・クラブ職人  
として定評のあったアンドルー・ディクソンを指す。  
ティトラの記述によれば、ディクソンは少年で  
あった頃にヨーク公爵ジェイムズ (後のジェイムズ  
2 世) のゴルフ・クラブを運び、彼より前に走り出  
してボールが落ちた地点を告げる役目 (現在で言う  
フォア・キャディ) を果たしていたという。(19)

ピグマリオンとカスタリオの両雄が戦闘の舞台に  
立ったところで、リースのゴルフ場を宰領する女神  
ゴルフィニアと、妖精の姉妹ヴァージュリラ  
(Verdurilla は新緑を表わす Verdure と小川を表わ  
す Rill の合成語) とギャンボリア (Gambolia は浮か  
れ騒ぎを表わす Gambol の派生語) が現われる。二  
人の素性を訊ねるヴァージュリラに対して、ゴル

フィニアはカスタリオの出自を語る。

イエルナの銀色の岸辺からカスタリオは来たが、  
彼はまずアンドレアの原で名声に言い寄った、  
彼の父はドルイド僧で、(七日のうち一日に)  
美德の道、天に至る確かな道を教えた。  
ピクト族の首都で善き人は、徳に満ちた  
人生を送り、そこで息を引き取ったのだ。  
息子は今や美しいエドナの街に住んでおり、  
我らの砂まじりの原で名声を追いかけている。

(1: 71-8)

「イエルナ」はアーン川、「アンドレア」はセント・アンドルーズ、「ドルイド僧」は聖職者、「エドナ」はエディンバラを指す。「ピクト族の首都」についてクラブコットは、ヘンリー・アダムソンの第7歌43行「ピクト人の大いなる首都」およびカントの注釈に基づいて、アバネシーを指すと主張する。(20) このようにマシソンは地名や固有名詞をことさらに詩的な表現に変える傾向（他の疑似英雄詩でも同様だが）があり、通例であれば自注を施すところであるが、一切ないのが実情である。もっとも地名がどこを指すのか分かつるが分かるまいが、作品の読解にはほとんど影響を及ぼさない。そして主人公の好敵手であるカスタリオは、マシソンの友人にしてエディンバラで本屋を営んでいたアレキサンダー・ダニングがモデルである。(21) ファーガソンは「カスタリオ」は霊泉「カスタリア」からの類推語であるとして、「マシソンは詩人に靈感を与える者として、友人を讃えている」と主張する。(22)

続いてゴルフフィニアは、ピグマリオン（マシソン本人とされる）を「エドナのドームの中で机のそばに座り、『前述の』や『そのような』で文書を引き延ばす」(1: 79-80)と説明する。これはマシソンが法律関係の仕事に携わっていたことを表わしているのであろう。ファーガソンは「ピグマリオン」(Pygmalion)という名について、ギリシア神話でヴィーナスによって命を吹き込まれた彫像と結ばれる彫刻家に結びつけて「マシソンは自作に生命を吹き込みたかった」と述べている。(23) しかし「背の

低いピグマリオンを見よ、ゴルフの技に長け、体は小さいが、その心は向こう見ずなのだ」(1: 81-2)という表現を見る限り、これはピグミー族 (Pygmy) とライオン (Lion) の合成語ではないか。

二人の好敵手は、勝者の苦勞に十分報いる「30ジル (7.5 パイント) は入る大きな盃」(1: 86)を敗者が奢る約束をして競技に臨む。その中身は「パンチ」(1: 99)である。ここでギャンボリアが勇敢なピグマリオンを援助したいとゴルフフィニアに申し出ると、女神はこれを許した上に、ヴァージュリラにカスタリオを助力せよと命じる。このように神々や妖精（叙事詩では machine と呼ばれる）が各々の人間に加護を与えるのは、『イーリアス』など古典叙事詩の約束事であり、18世紀英国の疑似英雄詩にも散見される特徴である。

### 3. 『ゴフ』第2巻

第2巻は田園の神々やゴルフフィニアへ祈願で始まり、カスタリオとピグマリオンはようやく競技を開始しようとする。

今や族長たちはかのホールで試合を始める、  
隣接したサンザシから名前を取ったところだ、  
二人はボールを押し出すクラブをしっかりと握り、  
小さな球を攻撃すべく腕を伸ばした。

(2: 9-12)

ヒルの注によれば、このホールには年経たサンザシの木が生えていたことから、「サンザシの木のホール」(The Thorn-tree Hole)と呼ばれていたという。(24) これから始まる二人の競技は、クロムウェルの侵略に対して血まみれになって勇猛果敢に戦ったスコットランド人のようにではなく、「憤怒に任せぬ、軽快な戦闘を遂行する」(2: 26)と描写される。

キャディ役の「よろめくアイルス」(2: 27)は二人の武具（ゴルフ・クラブ）を運び、緑地に小さな二つのピラミッド（ティーの代わり）を建てると、その上にボールを注意深く乗せる。ハミルトンによれば、「アイルス」は『オデュッセイア』第18巻

に登場する乞食を指す。(25) ポープの英訳から該当箇所を訳してみる。

巨大な体をした不愛想な浮浪者で、  
人間の面汚しであり、心根は臆病であった。  
彼は饗宴から饗宴に飛び回り、満足せずに  
貪り食らい、温情ある時に居合わせる。  
母親の膝の上で赤子として寝ていた彼に、  
母は生まれた日にアルナイオスと名付けたが、  
仲間は少年をアイルスと呼んだのだ、  
万人の使い走りとして飛び回ったからで、  
アイルスとは仕事を表わした名前なのだ。

マックは注釈でアイルスについて、神々の使者を務める虹の女神イーリス（アイリス）との関連を指摘する。(26) なお『オデュッセイア』のアイルスは、身をやつしてイタケーに戻ったオデュッセウスに喧嘩を吹かけけるが、いともたやすく打ちのめされてしまう小物である。マシソンがアイルスという名をつけた理由は不明であるが、このキャディは先行して前方に人がいないことを知らせ、カスタリオの打ったボールについて「歓迎すべき報せ」(2: 88)を送るなど、ある意味で使い走りという役目を果たしていることは確かだ。

いよいよ競技が始まるかと思わせておきながら、マシソンはここでゴルフ・ボールの製造過程を延々と語り始める。

ボブソンの業物で、彼は比類なき技術で  
固い外皮を形作り、あらゆる部分をつなぎ、  
巧みにかがった穴を軸受に挿入すると、  
丸い小穴を通して羽毛の潮を駆り立てる。  
次々と群れなして力強い革に押し込み、  
羽毛は固くなって、革は膨れていく。  
彼は汗だくで詰め込み、さらに熱心に詰め込み、  
やがて膨れた球はもう中には入らなくなる。  
恐ろしい鷹の誇りが、さまざまな色をした  
鳩の光沢ある羽毛とここで混じり合うのだ。  
ヒバリの小さな羽がありふれた家禽と、  
戦い好きな雄鶏の黄色い栄光と混じり合う。

クラブコットによれば、ここに記された「ボブソン」は、セント・アンドルーズでゴルフ・ボール製造業者として名高いロバートソン一族のことであるという。(27) またハミルトンは中に詰める鳥の種類によってボールの値段は異なり、「ありふれた家禽」たる鶏の羽を多く使ったボールは安価だが、鷹や鳩の羽を使ったデラックスなボールは高価でよく飛ぶと推測している。(28)

第2巻も半ばに達したところで、大胆なカスタリオが脆弱なピグマリオンに脅しをかける。自分は勇敢なマシ阿斯、モラヴィオ、高名なクレファニオといった好敵手を次々と打ち破った猛者である。ヒルによれば、「マシ阿斯」はカスタリオ（アレクサンダー・ダニング）の兄弟マシュー・ダニングであり、クラブコットによれば、クレファニオはクラブ製造業者のジョン・クレファンを指すという。(29) カスタリオの脅しは続き、ピグマリオンの打ち損じたボールはゆっくりと転がって止まってしまうが、自分の打球は「彗星のように天球を流れていく」(2: 74)と豪語する。クラブコットの計算が正しければ、カスタリオことアレキサンダー・ダニングは44歳、ピグマリオンことマシソンは22歳で、親子ほども年が違ってくる。(30) これに対してピグマリオンは、カスタリオの空自慢を軽蔑して、ゴリアテが相手であろうとも自分が臆することはないと答える。

ついにカスタリオが第1打を打つと、ボールは空を引き裂くように飛んでいく。一方ピグマリオンは内心動揺していたのか、ボールの上半分を叩いてしまい、緑地に沿ってボールは疾走する羽目となる。ここでマシソンは古典叙事詩でよく見られる比喩を挿入する。

あたかも震える野ウサギが猟犬を認めて、  
エニシダの巣からすばやく跳躍すると、  
丘や野原を疾走し、風を追い越して、  
猟犬や狩人たちを後方に引き離すごとし。

(2: 93-6)

打ち損ないで転がるボールを、猟犬の追跡を逃れようと疾走する野ウサギに喩えるのは、いかなものであろうか。ただし助勢するギャンボリアによって、ピグマリオンを回復したボールは砂地（バンカー）を飛び越え、丘の頂上まで転がっていく。神性を帯びた者が英雄を助けるのは叙事詩の常道であり、18 世紀の英国で書かれた疑似英雄詩にもしばしば描かれている。ポープの『髪の手略奪』でベリンダを守ろうとするシルフがもっとも有名であろう。他にもコンカネンの『フットボールの試合』では、花の女神フローラが西風の精ゼフィルスに命じて、敵のシュートをゴールの枠外に逸らしてしまう場面などがある。

ここでマシソンは競技の進展を一挙に端折ってしまう。5 ホールを「三度」(2: 103) 回った結果、カスターリオが 9 ホールを、ピグマリオンが 6 ホールを勝ち取ることになる。

#### 4. 『ゴフ』第3巻

競技は夕暮れまで続き、両者はなおも技を競い合っている。ゴルフィニアは英雄たちと彼らを支持する妖精たちを見守りながら、「運命の書」(3: 21) を開いて戦闘の結末を占う。

驚嘆すべき書物には、クラブを振り上げ、  
ボールを強打する万人の運命が収められている。  
頁の間に流れる不思議な韻律で、  
過去と現在と未来が示されているのだ。

(3: 25-8)

すると勝負はカスターリオの勝利で終わり、ピグマリオンは相手の優れた技量を認める結果になると判明する。神による予言も古典叙事詩に頻出する要素の一つであるが、すでに第2巻の最後でカスターリオが 9 ホール、ピグマリオンが 6 ホールを取ったことは明らかなので、カスターリオの優位はいささかも揺らぐことがない。仮に 5 ホールの 4 周目を完遂すれば、ピグマリオンの逆転もないわけではない。しかしゴルフィニアは妹の調停者たる女神ヴィクト

リアに「長く引き伸ばされた戦闘を止める」(3: 43) ように命じるのである。かくして勝負は 16 ホール目で決着がつくことになる。

最後のホールでピグマリオンが打ったボールは、覇気満々と天に昇っていったが、逆風に押し戻されて野原に落ちる。そのさまをマシソンはまたしても比喩で味付けしようとする。

あたかも鳥が、さまよう狩人に脅かされて、  
種を蒔いた畑を離れ、大空へと舞い上がるが、  
飛翔は短く、猛々しい復讐の女神が傷つけ、  
地面に真逆様に急落させてしまうごとし。

(3: 63-6)

引用後半の 2 行は農耕詩の下位区分にあたる狩猟詩で頻繁に使われる表現であり、たとえばウェルギリウスのドライデン訳『農耕詩』(1697) には「故郷の空は悪疫に冒されていることを鳥たちに証明し、雲間から鳥たちは落下し、その魂を天に残す」(3: 814-5) とあり、ジョン・フィリップスは『林檎酒』(1708) で「鳥たちは小さな生命を雲の上に残し、地上に真逆様に墜落する」(2: 175-6) と歌い、ポープは『ウィンザーの森』(1713) で「上昇するヒバリは喉を震わせようとした時に、落下して、その小さな生命を空に残す」(ll. 133-4) と模倣した。スコットランドを代表する詩人ジェイムズ・トムソンも『四季』(1746) に収められた「秋」で「追い立てて四散させ、傷つけられ、鳥は気流を離れ、旋回しながら落ちてくる」(ll. 377-8) と歌った。(31) 先に引用した野ウサギの描写も狩猟に関わるものであり、マシソンは疑似英雄詩を書く上でこのような場面が必要だと考えたのであろう。

一方のカスターリオが芯を捉えた低い弾道のボールは、強風をものともせず、ツバメのように野原をかすめるように飛ぶが、雌羊の額を直撃してしまう。これも叙事詩の戦闘場面を思わせる件である。

無害な羊が、運命に倒れるように命令され、  
急速なボールの恐ろしい勢いを感じる。  
怒り狂う弾丸が彼女の額めがけて飛び、

突然の苦しみが物言わぬ雌羊を襲った。  
 よろめいて彼女は緑の原に崩れ落ちる、  
 痙攣する苦痛が傷ついた脳を苦しめる。  
 偉大なパーンは彼女が草に横たわるのを見ると、  
 その罪に復讐せずに見過ごすことを許さない。

(3: 71-8)

パーンは喘いでいる雌羊に小便をかけて苦痛を和らげてやる。「賢き神々は小便すら無駄にしない」(3: 88) と驚くべき詩行が続いた後で、パーンは蹄でボールを蹴り飛ばし、砂地（バンカー）に埋め込んでしまう。カスターリオを保護するヴァージュリラは、地元の名士とおぼしきパトリコの姿に身を変えて近づき、羊がゴルフニアの原に侵入するとは恥辱に他ならず、雌羊の死を招いたのはカスターリオではなく偶然であると語りかける。しかし憤怒に燃えるカスターリオは、パーン目がけて「重々しい武器」(3: 108) を投げつけ、牧神はこれを避けて逃げ出すが、投げられたクラブは「罪もないトレー」(3: 110) に致命傷を与える。ハミルトンは「トレー」を羊飼いと解し、「これは実際のクラブを放り投げた事故に言及しているのかもしれない」と無責任な注をつけている。(32) だが「忠実な犬たちは主人（パーン）の足取りを追う」(3: 81) とあり、「不運なトレーはもはや羊の世話をすることなく」(3: 111) と描かれており、トレーが牧羊犬であることは間違いない。このあたりの展開には違和感をおぼえずにはいられないが、ゴルフという競技で戦闘場面を模した描写をすることは困難であり、またカスターリオを神にも勝る英雄として際立たせるために、マシソンは故意に羊と犬を犠牲にしたのであろう。

カスターリオはバンカーに埋まったボールを強打し、フェアウェイに乗せることに成功する。続いてピグマリオンは過たずボールを直進させ、ホール（カップ）からクラブ 2 本分の距離に寄せる。カスターリオのボールはホールからクラブ 15 本分のところにあり、しかも前方には荷車の通る道が行く手を遮っていた。しかしカスターリオの打球は障害物を越えて、グリーン上のホールに見事に収まった。落胆したピグマリオンのパットは弱々しく、グリーン上

の草に動きを止められてしまう。

ピグマリオンは彼のために杯を準備して、  
 彼に戦闘の栄誉を譲らなければならない。  
 名声の勝ち誇る翼に乗って彼の名は舞い上がり、  
 やがて時が尽きて、もはやゴルフは終わったのだ。

(3: 141-4)

かくして二人の勝負はカスターリオの勝利で幕を閉じる。この作品は題名に疑似英雄詩とはっきり示されており、マシソンがこの分野で名を残そうとした気概は感じられる。女神ゴルフニアの宰領で、ヴァージュリラとギャンボリア、さらにはヴィクトリアといった神性が二人の勝負に助力するという設定も、疑似英雄詩の重要な要素の一つである。ただしギャンボリアがピグマリオンの打ち損ないを補ってやる一方で、ヴァージュリラは激怒するカスターリオを落ち着かせようと言葉をかけるだけで、実質的な助力は与えていない。見事なバンカーショットによって自力で勝利をもぎ取ったカスターリオは、勝つべくして勝ったのである。またゴルフという競技で戦闘に類した描写をすることはきわめて困難であり、そのためにマシソンは犬や羊を敵軍の兵士の代わりに殺し、カスターリオにパーンを攻撃させているわけである。『ゴフ』は疑似英雄詩として卓越した作品とは言い難く、マシソンはこれ以外に見るべき詩を残していないが、それまで誰も試みなかったゴルフという主題を扱って長編詩を書き上げたことは記憶されるべきであろう。

## 注

- (1) Joseph Addison, "Sphaeristerium," *Examen Poeticum Duplex* 34-7., "The Bowling-Green," trans. Nicholas Amhurst, *Poems on Several Occasions* (London: E. Curll, 1719) 109-20., Matthew Concanen, *A Match at Football: A Poem. In Three Cantos* (Dublin: Printed for the Author, 1720)., William Somervile, "The Bowling Green," *Occasional Poems, Translations, Fables,*

- Tales* (London: Bernard Lintot, 1727) 67-80., William Somerville, *Hobbinol, or The Rural Games. A Burlesque Poem, in Blank Verse* (London: J. Stagg, 1740), Nicholas James, "Wrestling. A Poem," *Poems on Several Occasions* (Truro: Andrew Brice, 1742) 21-40., James Love, *Cricket. An Heroic Poem* (London: W. Bickerton, 1742?), Paul Whitehead, *The Gymnasiad, or Boxing Match* (London: M. Cooper, 1744) 拙著「ホワイトヘッドの拳闘詩『ジムナジアッド』」『駿河台大学論叢』第 53 号 (2016) 161-71., 「コンカネンの疑似英雄詩『フットボールの試合』」『駿河台大学論叢』第 58 号 (2019) 175-83., 「アディソンとサマヴィルの疑似英雄詩『転球場』」『駿河台大学論叢』第 59 号 (2019) 81-90. を参照されたい。
- (2) *The Wiley-Blackwell Encyclopedia of Eighteenth-Century Writers and Writing 1660-1789*, eds. Paul Baines, Julian Ferraro, Pat Rogers (Chichester: Wiley-Blackwell, 2011) 235.
  - (3) Thomas Mathison, *The Goff. An Heroi-Comical Poem* (Edinburgh: J. Cockran, 1743) テキストには 3 つの版を収めた編集本を使用した。 *The Goff. Facsimiles of Three Editions of the Heroi-Comical Poem by Thomas Mathison*, eds. Joseph S. F. Murdoch & Stephen Fergusson (United States Golf Association, 1981)
  - (4) Richmond O. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1932) 416.
  - (5) Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England* (London: T. Bensley, 1801) 80-1.
  - (6) James Lindsay Stewart, *Golfina Miscellanea* (London: Hamilton, Adams & Co, 1887) 10.
  - (7) Thomas Mathison, *The Goff. An Heroi-Comical Poem. in Three Cantos. Second [Third] edition* (Edinburgh: Peter Hill, 1793)
  - (8) Henry Adamson, *The Muses Threnodie; or, Mirthful Mournings, on the Death of Mr Gall*, compiled by James Cant (1638; Perth: George Johnston, 1774) 18.
  - (9) James Arbuckle, *Glotta A Poem* (Glasgow: William Duncan, 1721), また James Arbuckle, *Selected Works*, ed. Richard Holmes (Lewisburg: Bucknell University Press, 2014) 35. はこの詩行にアディソンの「転球場」の影響を見る。
  - (10) *The Scots Magazine*, 6 (1744) 197.
  - (11) John Kerr, *The Golf-Book of East Lothian* (Edinburgh: T. & A. Constable, 1896) 44, 50. なお 43 頁には「銀のクラブ」のヘッド部分の写真が掲載されている。
  - (12) IMC Macintyre, "Edinburgh Surgery and the History of Golf," *Journal of the Royal College of Physicians of Edinburgh* 37 (2007) 369.
  - (13) "Articles & Laws in Playing at Golf," Gary Belsky & Neil Fine, *On the Origins of Sports* (New York: Artisan, 2016) 99-101. Scottish Golf History のウェブサイトにも掲載。
  - (14) Tobias Smollett, *The Expedition of Humphry Clinker* (London: Penguin, 1967) 262-3.
  - (15) Alastair J. Johnston, *The Clapcott Papers* (Edinburgh: privately published, 1985) 452.
  - (16) Anonymous, *Memoirs of the Life of the Late Right Honourable Duncan Forbes, Esq; of Culloden; Lord-President of the Court of Session in Scotland* (London: printed for the Author, 1748) 59-60.
  - (17) *The Clapcott Papers*, 437-8.
  - (18) Strutt, 81.
  - (19) W. Tytler of Woodhouselee, "On the Fashionable Amusements and Entertainments in Edinburgh in the last Century," *Archaeologia Scotica: or Transactions of the Society of Antiquaries of Scotland*, 1 (1792) 504.
  - (20) *The Clapcott Papers*, 453., *The Muses Threnodie*, 171-2.
  - (21) *The Clapcott Papers*, 454-5.
  - (22) Stephen Fergusson, "Printing and Literary History of *The Goff*," *The Goff*, 14.
  - (23) Fergusson, 14.

- (24) Peter Hill, “Notes and Illustrations to *The Poem of Goff*,” *The Goff*, 30.
- (25) David Hamilton, *The Thorn Tree Clique: a new analysis of Mathison’s poem The Goff* (Kilmacolm: Patrick Press, 2001) 15.
- (26) Alexander Pope, *The Odyssey of Homer*, 2vols, ed. Maynard Mack (London: Methuen, 1967) 2: 166-7.
- (27) *The Clapcott Papers*, 441-2.
- (28) Hamilton, 16.
- (29) Hill, 31., *The Clapcott Papers*, 458.
- (30) *The Clapcott Papers*, 457.
- (31) John Dryden, *The Works of Virgil in English 1697*, vol 5 of *The Works of John Dryden*, eds. William Frost & Vinton A. Dearing (Berkeley: University of California Press, 1987) 236., John Philips, *Cyder, A Poem. In Two Books* (London: Jacob Tonson, 1708) 59., Alexander Pope, *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, eds. E. Audra & Aubrey Williams (London: Methuen, 1961) 162., James Thomson, *The Seasons*, ed. James Sambrook (Oxford: Clarendon Press, 1981) 158.
- (32) Hamilton, 27.

本稿は科研費の基盤研究C「十八世紀英詩におけるバーレスクと民衆文化」(課題番号 18K00380) による成果である。